



●磨崖仏 [水口町新城]

※野洲河原に立つ至徳元年(1384)の北朝年号をもつ磨崖仏

甲賀市の文化財⑧

甲賀の石造文化①

石に刻まれた祈りの世界

近江は石造美術の宝庫で、甲賀市内には、五輪塔や宝篋印塔、宝塔、石燈籠、磨崖仏など、さまざまな形式の祈りの造形ともいべき石造美術が残されています。

中でも、五輪塔や宝篋印塔、

宝塔などは、死者の菩提を弔う供養塔として鎌倉時代以降に盛んに造立されました。

これらの石造物には、造立形式や装飾文様などに地域的特徴が見られ、石工の個性や造立者の意図がよく表現されています。

近江では、石塔は直接地上に建てられるのが一般的ですが、甲南や信楽地域では反花と呼ばれる蓮華の装飾をあしらった基壇を置き、基礎の側面を素面とする特徴をもち、信楽町玉桂寺境内の五輪塔を好例として大和地方の影響を見ることが出来ます。

また土山や水口の大半の地域では宝篋印塔の基礎側面に蓮華をあしらった「三茎蓮」と呼ばれる「近江式装飾文」に特徴づけられます。これは、仏教的文様を石造美術に取り入れた近江独特の形式です。

また土山地域では隣接する日野町蔵王で産出された花崗岩(米石)を使用している石造物が多く見られることに特徴があります。

甲賀の地理的要因から近江式装飾文を刻む石造物は、野洲

川を挟んで大和系と交錯する地域的な特徴が見られます。

甲南・水口の一部の地域では、反花基壇と三茎蓮の文様を組み合わせた折衷様式を採用しているなど、この地が石造文化の交流点であったことを示しているのです。

現在、甲賀市の石造物は、磨崖仏や石造反橋(太鼓橋)などを含めて、16基が市の文化財に指定されています。

これらの指定の石造物以外に、道標や富士浅間信仰にまつわる石仏や庚申碑など、たくさん信仰に関わる石造物が残されています。これらも甲賀地方を代表する大切な石造美術です。

いずれも、悠久の営みを越えて今に伝わり、その歴史の意味と中世の人びとの信仰、石工の技術等、当時の社会の様子を私たちに語ってくれる大切な「生き証人」なのです。

【問い合わせ】

文化財保護課

TEL 86-8026
FAX 86-8380

甲賀市域は、早くから東海道や柚街道など陸路が網の目のように発達し、人や荷物の往来が盛んでした。一方の水路は、「近江太郎」と呼ばれた野洲川で、戦前まで材木を運ぶ筏流し行われていたことが記憶されるほか、明治初期には旧土山宿の西口から乗合船の便のあったことが『土山町史』に記されています。

写真の資料はこの船便に関するもので、陸運元会社土山分社の矢田猪平が、土山の西口から水口をへて、栗太郡伊勢落(現栗東市)までの乗合船を新規発明したという多色刷りのちらしで、陸運元会社があった明治6年から8年に刷られたと考えられます。運賃や定員を記すほか、夜明け前に出航すれば1時間に2里(約8km)の速度で下り、伊勢落から京都まではその日のうちに到着(日着)可能と強調します。当時京都に日着するには石部が東の限界とされたためでしょう。

土山などの旧東海道沿いは鉄道に恵まれず、乗合馬車や

乗合自動車など陸上輸送に力が注がれました。乗合船はそんな新時代への過渡期に登場したようです。高瀬船に身を任せ、川岸の景勝を楽しみながらの川下りは、さながら遊覧船の趣があり、一度体験してみたいと思わせませす。

市史の小径

第4回

野洲川に定期船が走った!



【問い合わせ】 総務課市史編纂係
TEL 86-8075 FAX 86-8380